

## Ⅲ-2 障害児

障害児合同作業チームは、「障害者制度改革の推進のための基本的な方向性について」（平成22年6月29日閣議決定）で示された次の2点について、論点整理をした。

- ・地域の身近なところで提供されるべき障害児やその保護者に対する相談支援と療育等の在り方について
- ・障害児への支援が、利用しやすい形で提供されるための具体的方策について

### 1. 児童福祉法関係

【表題】権利擁護

【結論】

- 障害児を含むすべての子どもの基本的権利を保障する仕組みの創設が望まれることから、児童福祉法でオンブズパーソンを制度化するよう、現行法に基づく権利擁護システムの検証を引き続き進め、社会保障審議会児童部会に検討の場を設け、制度の在り方について検討を進めるべきである。

【説明】

子どもは、児童福祉法に規定されている理念を踏まえ、ひとしく愛護されなければならないことはもとより、権利の主体とされなければならない。障害の有無や程度にかかわらずすべての子どものための権利擁護の仕組みを市町村に設けるために、オンブズパーソンを、国連の児童の権利に関する委員会の勧告（CRC/C/JPN/CO/3, 2010.6.）を踏まえ、児童福祉法での制度化を目指して検討の場を設けるべきである。障害児は、契約当事者が保護者であり、特に、施設への入所については家庭生活を奪われることにもなるため、子どもの視点から最善の利益を保障できる権利擁護の仕組みが必要である。既

じちたい とりく せんこうじれいとう しゃかいほしょうしんぎかい  
 に自治体で取組まれている先行事例等もあることから、社会 保障 審議会  
 じどうぶかい けんとう すす おんぶずばーそん せいどか はか  
 児童部会で検討を進め、オンブズパーソンの制度化を図るべきである。

ひょうだい そうきしえん  
**【表題】** 早期支援

けつろん  
**【結論】**

○ 母子保健法に基づく障害の早期発見を、保健指導や医療の保障にと  
 どまらず、障害児が地域の子どものとしての育ちを保障されるよう、児童  
 福祉法の子育て支援事業と連携し実施するべきである。

○ 健康診査等による要支援児に対しては、家庭への訪問・巡回等、家庭  
 での育児支援や児童一般施策の活用を基本的な在り方とし、児童及び  
 保護者の意思に基づいて、児童発達支援センター、医療機関及び入所  
 施設等を活用できるよう児童福祉法に定める必要がある。

せつめい  
**【説明】**

母子保健法は、学校保健安全法、児童福祉法等に基づく事業と協調す  
 るよう規定されているが、現状は、障害の発見から療育や特別支援教育  
 へと「特別な支援過程」につながるだけのことが多い。障害の発見を地域の  
 子育て支援、さらに地域の学校への就学につなぐことの出来る制度設計が  
 必要である。

ひょうだい しょうがい りゆう せいげん いっぱんじどうしさく  
**【表題】** 障害を理由に制限されない一般児童施策

けつろん  
**【結論】**

○ 児童福祉法の保育所の入所要件には、障害を理由に利用を制限する  
 規定がないことを踏まえ、今後の「総合施設(仮称)」及び「こども園給付  
 (仮称)」の制度化において、障害児の入園が拒否されないように応諾  
 義務を課す必要がある。また、必要な支援が確保されるよう、必要な規定

じどうふくしほう そうごうしせつほう かしょう およ えんきゅうふ かしょう  
を児童福祉法、「総合施設法（仮称）」及び「こども園給付（仮称）」  
かか しんぽう もう ひつよう  
に係る新法に設ける必要がある。

- しょうがいじ じどうふくしほう ほうかごじどうくらぶ さんか きぼう ばあい  
障害児が、児童福祉法の放課後児童クラブへの参加を希望する場合には、  
しょうがい りゆう きよひ しどういん かはい いりょうてきけあ  
障害を理由に拒否されるべきではない。また、指導員の加配や医療的ケア  
ひつよう こ かんごし はいち いどうしえんとう ひつよう しえん こう  
を必要とする子どもには看護師の配置や移動支援等、必要な支援が講じ  
られるべきである。

せつめい  
【説明】

じどういっばんしさく しょうがいじしさく りようほう しょうがいじ じどう  
児童一般施策と障害児施策の両方があることによって、障害児が児童  
いっばんしさく りよう りよう  
一般施策を利用しにくい、あるいは利用できないということがないようにする  
べきである。

こ こそだ しんしすてむ こ こそだ かいぎ かしょう しんしすてむ  
子ども・子育て新システムの「子ども・子育て会議（仮称）」や「新システム  
じぎょうけいかく かしょう とう じょうき りねん した けんとう すず  
事業計画（仮称）」等も、上記の理念の下に検討が進められるよう  
しょうがいじ かぞくおよ しえんしゃ さんかく しょうがい りゆう りよう きよひ  
障害児、家族及び支援者が参画し、障害を理由に利用が拒否されないよ  
う、かつ、ひつよう しえん かくほ じどうふくしほう そうごうしせつほう かしょう  
必要の支援が確保されるよう児童福祉法、「総合施設法（仮称）」  
およ えんきゅうふ かしょう せいどか ほうかごじどうくらぶ  
及び「こども園給付（仮称）」が制度化されるべきである。放課後児童クラブ  
どうよう せいび  
についても、同様に整備されるべきである。

ひょうだい りょういく  
【表題】療育

けつろん  
【結論】

- しょうがいしやくきほんほう かのう かぎ みぢか ばしょ りょういく た  
障害者基本法の「可能な限りその身近な場所において療育その他これ  
かんれん しえん う きてい ふ じどうふくしほう  
に関連する支援を受けられるようにするため」の規定を踏まえ、児童福祉法  
りょういく きてい せいり  
の療育の規定を整理するべきである。

- ちいきしゃかい みぢか ばしょ せんもんせい たか りょういく しょうがいじ たい  
地域社会の身近な場所において専門性の高い療育（障害児に対す  
はったつしえん いくじしえん そうだんしえんおよ いりょうてきしえん りよう  
る発達支援、育児支援、相談支援及び医療的支援）を利用できるように、  
じどうふくしほう みなお おこな ひつよう  
児童福祉法の見直しを行う必要がある。

せつめい  
【説明】

しょうがいじ こゝとくせい ふ せんもんせい たか りょういく みちか ちいき え  
障害児の個々の特性を踏まえた専門性の高い療育を身近な地域で得られるようにすべきである。児童福祉法に「療育の指導等」が規定されているが、規定の仕方が狭いため、地域社会の身近な場所で、思春期までの継続した療育が利用できるように整理すべきである。

ひょうだい つうしょ しえん  
【表題】通所による支援

けつろん  
【結論】

○ じどうはったつしえんせんた ちいき しょうがいじ う い せんもんてきりょういく  
児童発達支援センターは、地域の障害児を受け入れ、専門的療育を行うのみならず、積極的<sup>せっきよくてき</sup>に地域に出向いて、家庭や児童クラブ<sup>じどうくらぶ</sup>等で障害児支援<sup>しょうがいじしえん</sup>を行うことができるよう児童福祉法の必要<sup>ひつよう</sup>な見直し<sup>みなお</sup>を行うことが必要<sup>ひつよう</sup>である。

○ ちいき しょうがいじしえん きのうきょうか そくしん ほいくじょう  
地域における障害児支援の機能強化を促進<sup>ほいくじょう</sup>するために、保育所等訪問支援事業<sup>ほうもんしえんじぎょう</sup>、巡回支援専門員整備事業<sup>じゆんかいしえんせんもんいんせいびじぎょう</sup>および障害児等療育支援事業<sup>しょうがいじとうりょういくしえんじぎょう</sup>の拡充<sup>かくじゅう</sup>を図るとともに、障害児支援の専門性を相互<sup>しあ</sup>に提供<sup>ていきょう</sup>し合<sup>あ</sup>えるようにするべきである。そのために、保育所等訪問支援事業<sup>ほうもんしえんじぎょう</sup>の対象<sup>たいしょう</sup>に児童発達支援事業<sup>じどうはったつしえんじぎょう</sup>および同センターも加<sup>くわ</sup>えることが求め<sup>もと</sup>られる。

○ じどうはったつしえんせんた さまざま に ーず しょうがいじ たいおう  
児童発達支援センターは、様々なニーズのある障害児に対応<sup>たいおう</sup>できる職員配置基準<sup>しよくいんはいちきじゆん</sup>が必要<sup>ひつよう</sup>であるため、保育士<sup>ほいくし</sup>及び児童指導員<sup>じどうしどういん</sup>に加え、看護師<sup>かんごし</sup>や療法士<sup>りょうほうし</sup>等の専門職<sup>せんもんしよく</sup>を適正<sup>てきせい</sup>に配置<sup>はいち</sup>できるようにする。

せつめい  
【説明】

しょうがいじ ちいき みちか ばしよ ひつよう しえん りょう  
障害児が地域の身近な場所で、必要<sup>ひつよう</sup>な支援<sup>しえん</sup>が利用できるようにするために、児童発達支援センター<sup>じどうはったつしえんせんた</sup>等の機能強化<sup>きのうきょうか</sup>が必要<sup>ひつよう</sup>になっている。とりわけ、じんこうか<sup>じんこうか</sup> そちいき<sup>そちいき</sup>においては、深刻<sup>しんこく</sup>な課題<sup>かだい</sup>である。機能強化<sup>きのうきょうか</sup>のために、児童発達<sup>じどうはったつ</sup>

支援センターが地域に出向いて支援を行えるようにすべきである。また、これまで障害児通園施設が障害種別に分かれて培ってきた「専門性」を、他の児童発達支援センターや放課後等デイサービス事業所等に提供して相互のレベルアップを図ることに加え、福祉型センターには看護師や療法士等を、医療型センターには保育士等の必要な職員を確保して発達支援機能を向上させるべきである。

【表題】 障害児入所支援

【結論】

- 障害児の自立生活にむけて、「自立支援計画」の策定を障害児入所施設に義務付けること。その根拠規定を児童福祉法、児童福祉施設最低基準に設け、運営ガイドラインを整備するべきである。
- 入所時、入所後であっても、地域の子どもとして意識されるよう、児童相談所等に加え、市町村も関与できるようにすべきである。
- 地域生活への移行にあたっては、在宅生活が可能となるよう地域資源を整備し、家庭に帰れない場合でも、障害児専門の里親制度の拡充や障害児を対象とするファミリーホームなど、できるだけ家庭に近い養育環境を整備すべきである。また障害児入所施設の小規模化やユニット化を促進することが求められる。
- 新生児集中治療室（NICU）から在宅生活への移行において、障害が発見された直後の親に対するカウンセリングや、養育指導等の移行支援を担っている医療型障害児入所施設の母子入園支援は、有効であることから、これを拡充するべきである。
- 入所施設は、社会資源の一つとして、保育所を含む地域機関や家庭へ

ほうもん じゅんかいがた しえん おこな しょうがいじにゆうしょせつ  
の訪問、巡回型の支援が行えるようにし、すべての障害児入所施設に  
しょーとすていわく ぞうせつ  
ショートステイ枠を増設するべきである。

せつめい  
【説明】

じどうようごせつとう ぎむづ じりつしえんけいかく しょうがいじにゆうしょせつ  
児童養護施設等に義務付けられている自立支援計画は、障害児入所施設  
ぎむづ しょうがいじにゆうしょせつ じどうそだんじょう きょうぎ  
には義務付けられていない。障害児入所施設に、児童相談所等との協議  
しょうらい じりつせいかつ む じりつしえんけいかく さくてい ぎむか  
にもとづき将来の自立生活に向けた「自立支援計画」の策定を義務化する  
べきである。地域の子どもとして育つことができるよう、市町村も入所  
けつていとう かんよ ちょうききゅうかとう じたく すごす さい  
決定等で関与できるようにし、長期休暇等のように自宅で過ごす際に、  
そち にゆうしょ こ きょたくさーびすとう ひつよう さーびす りよう  
措置で入所した子どもであっても居宅サービス等、必要なサービスを利用  
できるようにすべきである。

にゆうしょせつ しょうきぼか かにい ちか かんきょう よういく  
入所施設は、小規模化し、できるだけ家庭に近い環境で養育できるよう  
せいび ちいきこう かのう しょーとすていわく  
整備するべきである。そのために、地域移行が可能となるようショートステイ枠  
ぞうせつ ふあみりーほーむとう かんきょうせいび ひつよう  
の創設やファミリーホーム等の環境整備が必要である。

ひょうだい ちいき みぢか ばしょ そうだんしえんたいせい  
【表題】地域の身近な場所での相談支援体制

けつろん  
【結論】

○ しょうだんしえん しょうがい とくてい じき みぢか ちいき かよ ば  
相談支援は、障害が特定されない時期から、身近な地域の通いやすい場  
ていきょう しょうがいじ こゆう さーびす じどういっばん  
で提供されるようにすべきである。障害児に固有のサービスと児童一般  
しさく へいこうりよう あ そうだんしえんことぎょうしゃ さーびすりよう  
施策との併行利用に当たっては、相談支援事業者でのサービス利用の  
てつづき かんそか ほんにん ほごしゃ どうい もと ふくし さーびす だいいしんせい  
手続を簡素化し、本人・保護者の同意に基づいて福祉サービスの代理申請  
かのう しょうがいじ かぞく りべん  
を可能にすることなど、障害児と家族のための利便のための  
わんすとつぷか すす もと  
ワンストップ化を進めることが求められる。

○ ちいきこそだ しえんきよてんじぎょう せんもんてき けんしゅう う そうだんしえんいん  
地域子育て支援拠点事業に、専門的な研修を受けた相談支援員を  
しょくいん はいち しょうがいじ そうだんしえんじぎょうしよ れんけい はか  
職員として配置し、障害児相談支援事業所と連携を図ることが  
ひつよう  
必要である。

せつめい  
【説明】

相談支援は、地域の身近な場所においてワンストップ型で提供されなければならない。相談支援事業者でのサービス利用の手続の簡素化が必要である。また、障害児の相談に対応できる職員の養成が必要である。

ひょうだい けあまねじめんと こべつしえんけいかく  
【表題】ケアマネジメントと「個別支援計画」

けつろん  
【結論】

○ 「個別支援計画」は、障害児・家族にとって身近な地域における支援を利用しやすくするため、福祉、教育、医療等の利用するサービスを一つの計画として障害児相談支援事業所が策定するべきである。6カ月程度の適当な期間で見直され、中期・長期的な見通しをもちつつ、支援の調整、改善が図られケアマネジメントされるよう児童福祉法の必要な見直しを行うことが求められる。

○ 「個別支援計画」は、必要とする支援を受けつつ、障害児が意思（自己）決定したものに基つき、策定されるべきである。個別支援計画に障害児の意見表明の欄を設け、被虐待児童の場合を除き、保護者の同意なくしては実行できない仕組みの構築が求められる。

○ 乳幼児期の「個別支援計画」は、保護者・きょうだいへの支援を含むものとして策定されるべきである。

せつめい  
【説明】

障害児に対するケアマネジメントは、単にサービス利用計画の策定にとどまらず福祉、教育、医療等の総合的な計画として策定され、必要な期間で見直され、サービス調整を障害児及び保護者の同意のもとに行うべきである。その際、「地域での育ち」を促進し、きょうだい支援を含めたものとするとともに、特に乳幼児期には保護者への「育児支援」を含めるべ

きである。

【表題】 要保護児童対策地域協議会と地域生活支援協議会の連携

【結論】

- 児童福祉法の要保護児童対策地域協議会と障害者総合福祉法（仮称）の地域生活支援協議会（子ども部会）とで検討が重なる子どもについては、保護者の同意の下に合同で協議会を持てるようにすべきである。

【説明】

要保護児童対策地域協議会と地域生活支援協議会が、それぞれに障害児の検討をするのではなく、一元化すべきである。また、要保護児童対策地域協議会の構成員として、障害児福祉関係者（障害児相談支援事業所や児童発達支援事業所等）が加わり、検討できる体制を整えるべきである。

【表題】 家族支援ときょうだい支援

【結論】

- 障害児が家族の一員として、地域の子どもの成長できるよう、児童福祉法において育児支援、家族支援を行うべきである。保育所等訪問支援事業の対象に「家庭」を加える必要がある。
- きょうだいのグループ活動等を支援し、障害児ときょうだいと一緒に参加できる事業を児童発達支援センター等が実施できるよう児童福祉法の必要な見直しを行うべきである。

【説明】

障害児のいる家庭の孤立化を防ぐために、保育所等訪問支援事業の

ほうもんたいしょう かてい くわ ほごしゃ しょうがいりかい いくじしえん かぞくしえんとう おこな  
訪問対象に家庭を加え、保護者への障害理解、育児支援、家族支援等を行  
うべきである。また、きょうだいへの支援は現在のところ事業化されていな  
いことから、活動支援や一緒に参加できるプログラムを実施できるようにす  
べきである。

## 2. 学校教育法関係

ひょうだい きしゆくしゃ  
【表題】 寄宿舍

けつろん  
【結論】

- とくべつしえんがっこう きしゆくしゃ ほんらい もくてき つうがく ほしょう  
特別支援学校の寄宿舍の本来の目的は通学を保障することにあ  
り、自宅のある地域社会から分離されないよう運用されるべきである。  
きしゆくしゃ じつたい ちょうさ ちいきしゃかい いこう む ほうさく けんとう  
寄宿舍の実態を調査し、地域社会への移行に向けた方策を検討する  
ひつよう  
必要がある。

せつめい  
【説明】

きしゆくしゃ ほんらいこういきがたく とくべつしえんがっこう つうがくほしょう  
寄宿舍は本来広域学区である特別支援学校への通学保障のために  
せっち 設置されたものであるため、がっこう やす つち ひ ちょうききゅうか かてい  
学校が休みになる土・日や長期休暇は家庭に  
もど 戻るように、運用されるべきである。きしゆくしゃ しょうしゃせい さいへん  
寄宿舍については、小舎制に再編  
することや、ふあみりーほーむとう つうがく ふう こんご  
ファミリーホーム等から通学できるようにすることも含め、今後  
の在り方を検討すべきである。あ かた けんとう しゅわとう しゅうとく いっぺい しゅうだんけいせい  
手話等の習得には一定の集団形成が  
ひつよう 必要であるというしてき 指摘があることから、きしゆくしゃ あ かた けんとう さい  
寄宿舍の在り方を検討する際に  
はこの点を考慮する必要がある。